

「さようなら」

藤原 道夫

「さよなら」だけが人生だ、と言った人がいるとか。それは大げさにしろ、送別が多くの人にとって人生の節目になっていることは確かであろう。

1890年夏松江に赴任したラフカディオ・ハーンは、1年4カ月でその地を去ることになる。熊本にある第五高等学校からの招聘を受けたのだ。松江を去る時の様子が『新編 日本の面影』の最終章「さようなら」に描かれており、当時の人たちの客人を送る心情が読み取れる。

先ず尋常中学校と師範学校で盛大な送別会が開かれ、大きな壺や日本刀などが贈られた。

松江を離れる当日、生徒たちが門前に待ち構えていて港まで同行する。湖畔の船着き場には、同僚の先生たち初め大勢の生徒たち、彼らの親や親戚それに商店の人たちが集まっていた。師範学校の校長がほんの短い握手のために駆けつける。

いよいよ出発、何人かの先生と生徒が次の港まで同行する。ハーンは城の天守閣が遠ざかり、見送る人たちが小さくなるまでデッキで手を振っていた。彼は自問する「もしどこか別の国で、同じ時期、同じ仕事をして暮らしたとして、これほどたゆまぬ温かな人情の機微に触れる喜びを味わえただろうか」と。そう思いながらも、心はすでに熊本に向いていたようだ。高等学校で教鞭をとることへの期待感があったろうし、また健康上の理由から寒い所よりも温かな地への憧れもあったであろう。

「さようなら」を読みながら、昔の送別を思い出した。

高校2年生になった時のこと、東京の教育系大学を卒業したばかりのK先生が所縁のない会津に赴任してきた。先生は2年間勤務し、東京の高校に転勤することになった。夜行列車で上京する先生を駅頭で見送るために、大勢の生徒が集まった。大声で万歳を唱えるグループもあった。大分後になって知ったことだが、先生は最初から東京勤務を希望していたのだ。

「会津の三泣き」という話がある。外からやって来た人は土地柄に馴染めずに泣く、一旦馴染むと情の篤さに泣く、そして外に出てゆく時に離れがたい思いに泣く。若くしてたまたま会津に赴任してきたK先生は、三泣きを少しでも体感したのだろうか。

駅頭などでの見送りは昭和の末頃まで細々と続いた。平成になると、移動手段の高速化が進んだせいもあり、見送りの光景は見られなくなる。同時に送別の情も縮んでしまったのか。